傾向性の本質主義的理論に向けて

——ブライア説の批判的検討——

海田大輔

一　はじめに

本稿は、傾向性（disposition）について考察を行う。傾向性とは、たとえば「脆さ」、「水溶性」、「弾性」、「可燃性」といった性質のことである。傾向性の正確な定義を与えることは簡単ではない（それはまさに本稿全体を通しての課題である）が、次のような準備的な特徴づけから始めることはできるだろう。すなわち、ある対象がある傾向性を持つということは、その対象がある条件のもとで何らかの変化をするということである。たとえば、角砂糖が水溶性を持つということは、その角砂糖を水中に投入すれば溶けるということである。花瓶が脆さを持つということは、その花瓶を硬い床に落とせば砕けるということである。ゴムが弾性を持つということは、それを引っ張れば伸びるということである。

なぜ傾向性が哲学の問題になるのだろうか。傾向性は、一方では、何の問題もなく実在的な性質であるように思われる。対象に傾向性を付与することをわれわれは日常的に行っており、そうした際にわれわれは傾向性を実在的な性質とみなしているはずだからである。陶磁器やガラスが脆さを持っているがゆえに、われわれはその取り扱いに際して相応の注意を払う。また、科学理論には多くの傾向性が登場するが、たとえば工学者が物体の弾性や磁性について語るとき、その工学者は弾性や磁性を物体の持つ実在的な性質とみなしているのではなかろうか。しかし他方では、傾向性は謎め

いたものであって、哲学的な分析を必要とするようにも思われる。たとえば、角砂糖の持つ水溶性は、その角砂糖の持つ大きさ・形・結晶構造といった非―傾向性的性質（とりあえずこのように呼んでおく）とは性格を異にするように思われる。形・大きさ・結晶構造などは、角砂糖が「端的に」持っている性質であるが、水溶性のような傾向性は、適切な条件（すなわち水に投入されること）のもとで、ある特定の顕在化（すなわち水に溶けること）をもたらすような性向として、角砂糖が「条件的に」持っている性質にすぎない、と考えられるかもしれない。さらに、形・大きさ・結晶構造などは角砂糖の「現実的な」ありように関わっているのに対して、水溶性は角砂糖の「可能的な」ふるまいに関わっており、その意味で「可能的な性質」にすぎない、と考えられるかもしれない。じっさい多くの哲学者は、傾向性は、形・大きさ・結晶構造のような非―傾向性的性質とは異なり、何らかの分析を必要とすると考えてきた。

傾向性を巡る論争は、アリストテレスの現実態と可能態についての考察にまでさかのぼる長い歴史を持つが、本稿の扱う範囲はもっと狭く、ここ三十年ほどの間に主として英語圏で行われてきた論争に限定される。そこでは、ごく大ざっぱに言えば、傾向性を他のもっと理解しやすい概念によって説明することに多くの努力が傾けられ、傾向性を非―傾向性的性質に還元しようとする立場が標準的見解とみなされてきた。本稿は、標準的見解の典型例として、プライア（E. Prior）の説を取り上げ、それに批判的検討を加えるとともに、プライア説に対する代案として「傾向性の本質主義」の一つのバージョンを積極的に擁護することを試みる。

考察は以下の手順を踏む。まず、第二節において、傾向性についてのプライアの説を、彼女が一九八五年に発表したモノグラフ『傾向性』（Prior, *Dispositions*）、および一九八二年にパーゲッター、ジャクソンと連名で発表した共著論文「傾向性についての三つのテーゼ」（Prior, Pargetter & Jackson, “Three Theses about Dispositions”）に基づいて再構成する。そこでは、プライア説の問題点として、傾向性が因果的効力を失うという点が浮かび上がる。続く第三節において、プライアの諸議論に抗して傾向性の因果的効力を救う試みがなされる。また、この試みを通して傾向性に関する

私見の一部が示されることになる。第四節においてプライア説の問題点を再度まとめた上で、最後に第五節において、それまでの批判的検討を通してその一部が示されつつあった「傾向性についての本質主義的理論」の一つのバージョンをまとめなおし、プライア説に代わるものとして提案する。

二　プライア説の再構成

水溶性のような傾向性的性質と形・大きさ・結晶構造のような非―傾向性的性質とを対比させるときにただちに生じる問いは、両者の関係はどのようなものであるかということである。二種類の性質が、同等の存在論的身分を有しつつ併存するのだろうか（性質二元論）。それとも、一方が他方に何らかの意味で基礎づけられるのだろうか。後者の場合、より基礎的な存在論的身分を有する性質をどのように考えるかということに応じて、(a)非―傾向性的性質を基礎におく立場、(b)傾向性的性質を基礎におく立場[1]が考えられる。さらに(c)非―傾向性的でも傾向性的でもない中立的な性質を基礎におく立場[2]も考えられる。

一九八〇年代以降の議論で標準的見解を形成したのは、傾向性を非―傾向性的性質によって説明しようとする(a)の立場であった。プライアが一九八五年に発表した『傾向性』は、傾向性を包括的に論じたモノグラフとしては初めてのものだったこともあり、多くの研究者によって取り上げられ、現代の標準的見解の一つとみなされるようになった。このモノグラフに従って、プライア説の内容を順に見ていこう。

プライア説の根幹をなすのは、次の二つのテーゼである。

（P1）因果性テーゼ：傾向性にはかならず因果的基盤（causal basis）がなければならない。

（P2）区別性テーゼ：傾向性はその因果的基盤と同一ではない。

ここで、傾向性の因果的基盤はプライアによって次のように定義される。すなわち、傾向性の因果的基盤とは、対象の

もつ性質あるいは性質複合体のうち、傾向性の顕在化をもたらすことにおいて因果的に活動的なもののことである。[3] これらのテーゼの内容は、プライア自身が用いる次のような具体例で説明するのがわかりやすい。一つの花瓶を考える。この花瓶は脆い、すなわち、床に落とせば割れる。脆いという傾向性の顕在化――すなわち割れること――をもたらすことにおいて、花瓶のもつ何らかの性質が因果的に活動的であるはずだ。この例においては、花瓶の微視的な分子構造がそれにあたるだろう。因果性テーゼが主張しているのは、いかなる傾向性についてもこのような因果的基盤性質が必ず存在するということである。そして、区別性テーゼが主張しているのは、そうした傾向性とその因果的基盤性質は互いに異なる存在者だ、ということである。したがって花瓶は、微視的な分子構造の他に、脆いという性質をも持っているということになる。[4]

さらに、傾向性の因果的基盤と傾向性じたいのあり方について、次のような主張がなされる。

（P3）傾向性の因果的基盤は、カテゴリカルな（categorical）性質である。

（P4）傾向性は、二階の機能的性質である。

ここでも具体例で考えるのがわかりやすい。花瓶の脆さの因果的基盤である微視的な分子構造は、非―傾向性的な性質であり（そうした性質は伝統的にカテゴリカルな性質と呼ばれる）、脆いという傾向性は微視的な分子構造という一階の性質によって実現される二階の性質とみなされるのである。そして、脆いという傾向性は、「落とす」というインプットに対して「割れる」というアウトプットを引き起こすような機能的役割によって定義され、花瓶の分子構造がその役割を果たしていると考えるのである。[5]

さて、以上で簡単に述べたプライア説は、非常に奇妙な一つの帰結を持つことが指摘できる。それは、**すべての**傾向性が因果的効力を失うという帰結である。今、手元の花瓶が床に落ちて割れたとしよう。このとき、因果性テーゼより、花瓶の脆さFには因果的基盤Bが存在する。また、区別性テーゼより、脆さFと因果的基盤Bは互いに異なる。そこで、

次のような疑問が生じる。花瓶の脆さの顕在化、つまり割れたという結果をもたらすさいに因果的に効力を持ったのはFであろうか、それともBであろうか。ここでは、二つの異なる性質の因果的効力が、一つの結果を巡って互いに争っているように見える。因果的基盤Bが傾向性の顕在化に対して因果的効力を持つことは、因果的基盤の定義より明らかである。そうすると、傾向性の顕在化が二つの異なる性質（傾向性の基盤と傾向性そのもの）によって二重に因果的に決定されているというありそうにない可能性を排除するなら、Fの因果的効力はいつでもBのそれによって先取りされ、Fのすべき仕事は何も残されていないように思われるのである。したがって、次のテーゼが帰結として導出されることになる。

（P5）無効力テーゼ：傾向性は因果的に無効力である。

実はプライアはこのテーゼを受け入れる。パーゲッターおよびジャクソンとの共著論文「傾向性に関する三つのテーゼ」の主題は、因果性テーゼ、区別性テーゼ、そして無効力テーゼを擁護することであった。そこでは、まず因果性テーゼと区別性テーゼを論証して、それらから無効力テーゼを導出するという議論が展開されている。また、『傾向性』においても、同じ主張がそのまま踏襲されている。[6]

しかし、傾向性についての標準的見解が、傾向性自体の無効力性の主張を含むというのは、かなり奇妙なことである。傾向性が因果的な効力をもたないなら、それは不必要なものとして排除されてしまうのではなかろうか。したがってプライアは、傾向性を分析した結果として、傾向性を存在論的に不必要なものとして葬り去ることになってしまったのではないだろうか。キム（J. Kim）が言うように「実在的であることと因果的力を持つことが歩調を合わせるgo hand in hand」[7]のであれば、傾向性はその因果的効力を失うとともに、実在性まで失うことになるのではないだろうか。

ここで注目すべきなのは、プライアが自らの立場を傾向性についての実在論とみなしていることである。『傾向性』の第三章は、傾向性についての非―実在論（現象主義）としてライルの立場を取り上げている。そして、ライルの立場

とプライアの立場との違いは、因果性テーゼを受け入れるか否かという点にあると論じている。[8] さらに、因果性テーゼを受け入れる自説は、傾向性の実在にコミットする立場であると明言している。[9] したがって、傾向性が因果的効力を失うという帰結は、プライア説の内部で不整合を生じさせるおそれがあるのだ。

三　傾向性の因果的効力を救う

本節では、プライアが（P1）「因果性テーゼ」と（P2）「区別性テーゼ」を擁護するために与えている議論を批判的に検討し、そのことを通して、傾向性の因果的効力を救う道を探る。

まず、因果性テーゼについて少々の確認をしておく。因果性テーゼの否定は何を意味するのだろうか。プライアによれば、傾向性に因果的基盤が存在しない可能性を許すことは、傾向性についての「現象主義（Phenomenalism）」を受け入れることに等しい。「現象主義」という言葉でプライアが指しているのはライル（G. Ryle）の見解であり、それは次のようなものである。

> ある傾向性的性質を所有することは、ある特定の状態にあるということではなく、ある特定の変化をするということでもない。それはむしろ、ある特定の条件が実現された場合には、ある特定の状態にならざるをえない（あるいは、なりがちである）ということである。あるいはまた、ある特定の条件が実現された場合には、ある特定の変化をせざるをえない（あるいは、しがちである）ということである。[10]

しかし、ここに引用されているライルの立場が因果性テーゼを否定することになるのかどうかは必ずしも明らかではない。ライルの主張のポイントは、(1)特定の状態にあることや特定の変化をすることは「現に生じている（occurrent）」

ことである、(2)傾向性的性質は「現に生じている」ことではない、という二点にまとめることができる。「現に生じている」特定の状態あるいは変化が傾向性の顕在化にとって活動的でありえないことを示すためには相当の議論が必要になるはずであるが、プライアはそれを行っていない。いずれにしても、もし前節最後の議論が正しいなら、そもそも因果性テーゼは傾向性の実在性を確保することに成功していないと考えられる。

次に、区別性テーゼの検討に移る。ある傾向性の因果的基盤が、傾向性そのものとは区別されることを、プライアは三つの議論で示そうとする。プライアの議論を再構成してまとめたうえで、それらに対する反論を試みる。

多重実現可能性からする議論　区別性テーゼを擁護するプライアの最初の議論は次のとおりである。一つの傾向性が異なる物体で異なる因果的基盤をもつということが経験的に妥当であるように思われる。ある物体Aでは脆さの因果的基盤は分子結合αであり、別の物体Bではそれが結晶構造βであるとしよう。傾向性とその因果的基盤が同一であるなら、物体Aにおいては「脆いこと＝分子結合αをもつこと」が成り立ち、物体Bにおいては「脆いこと＝結晶構造βをもつこと」が成り立つことになる。しかし、われわれはこれらを同時に主張することができない。なぜなら、同一性の推移性によって「分子結合αをもつこと＝結晶構造βをもつこと」という明白に偽である結論に導かれるからである。[11]

これは、一つの傾向性が互いに異なる様々な因果的基盤によって「多重的に実現」されることが可能であるように思われる、という経験的事実に依拠する議論である。この議論に応答する一つの方法は、多重実現可能性によって阻まれるのはタイプ―タイプ同一性であって、トークン―トークン同一性ではない、と主張するものである。[12] この花瓶の分子構造トークン（あるいはトローブ）とこの花瓶の脆さトークン（あるいはトローブ）は等しい。したがって、分子構造トークンが因果的効力をもつなら、脆さトークンも同様に因果的効力をもつ、というわけだ。

しかし、この方法は、花瓶の微視的構造トークンとそれが実現する脆さトークンとの同一性を保持しつつも、花瓶の

脆さトークンとガラスの脆さトークンとが厳密に類似するクラスに属することを否定することになる。すなわち、巨視的性質としての「脆さ」トークンは、成員が互いに厳密に類似するクラスを形成しないことになる。したがって、タイプとしての（あるいは少なくとも真正のタイプとしての）「脆さ」は実は存在しない、ということになる。これは、他の性質によって実現されている高階の傾向性は（つまりほとんどの傾向性は）真正の性質ではない、ということを意味する。この立場をとりつつ傾向性の実在性を救うためには、他の性質によって実現されているのではないような基礎的な性質を取り上げ、その基礎的な性質自体が傾向性なのだ、と主張するしかないだろう。そしてこれは、実は不可能ではない。なぜなら、因果性テーゼには、因果的基盤が傾向性とは異なる別の性質であるとか、因果的基盤が非―傾向性的な性質であるといった内容は含まれていないからである。

もっとも、基礎的な性質以外のほとんどすべての傾向性が因果的効力を失うこと、したがって実在性の根拠を失うことに対して抵抗があるかもしれない。その場合は、シューメーカー（S. Shoemaker）的な性質の存在論に依拠する第二の方法が考えられる。シューメーカーによれば、性質は次のように定式化される。すなわち、性質とは、その性質をもつことが、性質の担い手に一群の「条件的力（conditional powers）」を与えるような、そのような存在者である。[13] たとえば、果物ナイフは、「鋭利な形をしている」という性質をもっている。この性質は、その担い手（つまりナイフ）に、「もし鉄で出来ていたら、木を切ることができる」、「もし木で出来ていたら、バターを切ることができる」などの一群の条件的力を与える。そして、「鋭利な形をしている」という性質は、このような条件的力をすべて集めてできた集合によって特徴づけられると考えられるのである。さて、ある性質に対応する条件的力の集合が、他の性質に対応する条件的力の集合の部分集合になることがある。二つの性質の間に「被決定体（determinable）」―「決定体（determinate）」の関係が成立している場合がそうである。たとえば、「赤い」と「あかね色である」という二つの性質を考えよう。このペアにおいては、前者が被決定体であり、後者が決定体である。そして、「赤い」という性質に対応する条

件的力の集合は、「あかね色である」に対応する条件的力の集合の部分集合になっている。たとえば、あかね色には反応するが、他の色相の赤には反応しないように条件づけられたハトAを考えてみよ。性質「あかね色である」は、「しかるべき条件のもとでハトAの反応を引き起こす」という条件的力をもつが、性質「赤い」はこの条件的力を持たないのである。

こうした性質理論に基づいて、シューメーカーは、「実現関係（realization relation）」は被決定体―決定体の間に成立する関係の一種であるとみなすのである。すなわち、「ある性質Xが別の性質Yを実現しているということは、Yに対応する条件的力の集合がXに対応するそれの部分集合になっているということである」[14]。このように考えれば、複数の微視的性質とそれらの間に成立する諸関係によって、巨視的性質としての脆さが実現されているとき、後者に対応する条件的力の集合は前者に対応する条件的力の集合の部分集合になっていると考えることができる。この場合は、（第一の方策の場合とはことなり）脆さトークンが、その成員が互いに厳密に類似する脆さタイプを構成することが可能になる。問題の傾向性は、その因果的基盤性質の部分として同定されることになるのである。そして、因果的基盤と巨視的傾向性の両者がいずれも傾向性的な性質であるということになる。

いずれの方法をとるにしても、以上の議論は、他のいかなる性質によっても実現されていない傾向性というものの存在に加担し、またそうした傾向性じたいが因果的基盤でもあることを積極的に認めることになる。いわば「裸の傾向性」の存在を積極的に認めることになる。

プライアを含め多くの論者は、傾向性の因果的基盤は、傾向性とは「別の」性質であると考えてきた。たとえば、メラー（D. H. Mellor）は、因果的基盤の存在を擁護するさいに、次のように述べている。

物体の性質を、他の諸性質によって、とりわけ物体の空間的部分の諸性質によって説明することには美点がある。[15]

しかし、因果性テーゼには、因果的基盤が傾向性とは別に存在するという内容は全く含まれていない。また、モルナー（G. Molnar）は、究極的な素粒子に部分構造が存在しないことから、そうした素粒子に付与される電荷やチャームといった物理的性質は「基礎づけられていない（ungrounded）」あるいは「基盤を欠く（missing base）」と論じた。

> もし因果的基盤（base）あるいは基礎（ground）として選ばれうるような性質を持たないような力（powers）が存在するなら、このテーゼ〔すなわち、傾向性は因果的基盤あるいは基礎を持たなければならないというテーゼ〕は困難に陥る。私は、事実はこの通りであると思う。基盤となるいかなる性質も持たないために、基礎づけられていない（ungrounded）とみなされる傾向性的性質が存在するのである。[16]

しかし、傾向性が他の性質によって基礎づけられていないことは、その傾向性が基盤を欠くことを意味するわけではない。ここでは明らかに、傾向性の「基礎（ground）」と、傾向性の「基盤（base）」が混同されている。ある性質が別の性質によって基礎づけられるときには、巨視的レベルから微視的レベルに至るまでの階層構造の中で、上の階層に属する性質が下の階層に属する性質によって基礎づけられるということがしばしば思い描かれる。ここでは、一番下の階層に属する基礎的な物理的性質（たとえば素粒子のもつスピンやチャームなど）は、他のいかなる性質によっても基礎づけられないことになる。しかし、このことから素粒子のもつスピンやチャームが因果的基盤を持たないと結論づけることは出来ないのである。

傾向性の顕在化がブロックされうることからする議論　区別性テーゼを擁護するプライアの第二の議論は次のとお

りである。たとえ脆さという傾向性にただ一つの因果的基盤しか存在しないとしても、すべての脆い物体がαをもつ一方で、αをもつ物体のあるものは脆くないということがありうる。αをもつことにより生じる結果を打ち消してしまうような内部構造的性質Sが存在するなら、そういうことになるだろう。この場合、αを持つがSを持たないいかなる物体も脆く、すべての脆い物体はαを持つが、αとSとをともに持つ物体は脆くない、ということが可能である。しかし、もし傾向性とその因果的基盤が同一であるなら、こうした可能性はありえないはずだ。というのも、「脆さ＝αをもつこと」であるなら、αを持つすべての対象は「脆い」という傾向性をもつことになるからである。(17)

プライア自身は具体例を出していないが、この議論は、傾向性の顕在化が何らかの方法でブロックされる可能性を指摘していると思われる。たとえば、砂糖の塊の表面がプラスティックでコーティングされているような例を考えよ。このとき、砂糖の分子構造βが水溶性の因果的基盤である。たとえ水溶性をもつすべての対象が分子構造βをもつとしても、プラスティックでコーティングされた分子構造βは水溶性を示さないだろう。

この議論に対してまず第一に指摘できるのは、ここで傾向性とその顕在化とが混同されている疑いがあるということである。対象が水溶性をもつということと、水溶性の顕在化を呈するということとは区別しなければならない。水溶性をもつということは、適切な条件下で水に溶けるということであるから、プラスティックでコーティングされた砂糖が水に溶けないからといって、この砂糖が水溶性をもたないことが直ちに帰結するわけではないのである。(18)

第二に、傾向性はそれが顕在化する際に適切なパートナー傾向性の存在を必要とするという点を想起すべきである。砂糖の塊のもつ水溶性という傾向性は、水のもつ別の傾向性といっしょになったときに、溶解という顕在化をもたらすのである。砂糖の塊のもつ同じ傾向性が、プラスティックのコーティングのもつ別の傾向性といっしょになって、また別の顕在化をもたらすことは、傾向性とその因果的基盤の同一視を妨げない。

性質の名前は固定指示子であることからする議論　区別性テーゼを擁護するプライアの第三の議論は次のとおりである。クリプキが説得的に示したように、性質の名前は固定指示子であると考えられる。そしてこれは、傾向性の名前についても同様である。したがって、もし「脆さ＝αをもつこと」が真であるならそれは必然的に真であり、偽であるならそれは必然的に偽であることになる。しかし、脆い物体が因果的基盤αをもたないような世界が存在しうる。というのも、傾向性の因果的基盤が何であるかは偶然的な事実だからである。したがって、「脆さ」の外延と「αであるという性質」の外延がそのような世界においては互いに異なるという理由から、その世界において「脆さ＝αをもつこと」は偽であることになる。ところが、性質の名前は固定指示子であるので、この同一性言明は必然的に偽であることになってしまうのである。よって、傾向性とその因果的基盤は同一ではない。[19]

性質の名前が固定指示子であること、したがって傾向性の名前もまた固定指示子であることは受け入れても良い。しかし、「傾向性の因果的基盤が何であるかは偶然的にしか決まらない」という前提は、かならずしも受け入れる必要はない。第一の議論のところですでに述べたシューメーカー的な存在論をとるなら、傾向性の因果的基盤が何であるかは必然的に決まっていることになる。すべての性質はその因果的力によって個別化されることになるからである。

しかし、傾向性とその因果的基盤の間には、ある種の偶然的関係が成立しているように「見える」ことも確かである。たとえば、現実世界では水溶性をもつ砂糖の塊が、（適切な条件下にあるにもかかわらず）水に入れても溶けないような可能世界を考えることができるかもしれない。また、現実世界では結晶構造αで実現されている水溶性が、分子構造βで実現されているような可能世界を考えることもできるかもしれない。シューメーカー的な存在論をとる場合でも、こうした直観の由来を説明する義務はたしかにあるだろう。

傾向性と因果的基盤の同一視に反対する論者は、こうした偶然性は「法則の偶然性」に由来すると考える。すなわち、現実世界では水溶性を示す結晶構造αが、ある可能世界において水溶性を示さないのは、その可能世界で成立する自然

法則が現実世界の自然法則と異なっているからである、と考える。こうした考え方は、プライアがその著作のなかで一貫してとっているものである。しかし、傾向性と因果的基盤の間に成立しているように見える偶然性を、「法則の偶然性」以外の方向から説明することは可能である。次のように考えれば良い。現実世界において「結晶構造α＝水溶性」であるなら、この同一性はすべての可能世界で成立する。したがって、ある可能世界において、同じ結晶構造αを持つ物体が水溶性を持たないという想定は不可能である。このとき同じ結晶構造αだと思われているものは本当は別の（水溶性とは異なる）結晶構造βなのである。一見したところ法則の偶然性に由来すると思われる直観は、問題の物体が特定の因果的基盤を持たないかもしれないという「性質の所有に関わる偶然性」に由来すると考えられるのである。(20)

四　プライア説の問題点

第三節における議論は、プライアが自説の擁護のために挙げた緒論点は裸の傾向性を擁護する立場からでも首尾一貫した説明が可能である、という形のものである。それでは、プライアの主張を退ける積極的な理由はあるのだろうか。

プライア説を退ける積極的な理由の一つは、すでに第二節の最後で言及した。プライア説においてはすべての傾向性が因果的効力を失い、余分な性質として存在者のリストから消去される恐れがある、というのがその理由である。これに対して、次のように言われるかもしれない。傾向性が存在者のリストから消去されることには何の問題もない。傾向性の分析の歴史は、傾向性という謎めいたものをいかにしてよりなじみのある存在者で説明するか、というものであった。プライア説は、より謎の少ない非―傾向性的性質によって、謎の多い傾向性を説明し去ったのである、と。

これに対しては二つの応答が可能である。まず言えるのは、基礎物理学理論における性質はどれも傾向性としての特徴を持っているように見える、ということである。たとえば電荷qは、一定の条件のもとで（たとえば電荷q'をもつ別の対象がrの距離にあるときに）一定のふるまい（その別の電荷とkqq'/r^2の力で引き合うというふるまい）を引き起こす

ような性質として特徴づけることができる。花瓶の脆さ、角砂糖の水溶性のような巨視的な傾向性は、分子構造のようなより基礎的な性質で説明されるかもしれない。しかし、電荷やスピンといった基礎的な物理的性質は、それ自体が傾向性的な特徴を持っているにもかかわらず、他の非―傾向性的な性質で説明することは、少なくとも現段階では不可能である。

もう一つの応答は、心の哲学の論者達を悩ませる心的因果の問題に関わる。傾向性の因果的効力が非―傾向性的な因果的基盤性質によって先取りされるのと全く同様のやり方で、心的性質の因果的効力が物理的な実現性質のそれによって先取りされることになり、ひいては心的性質の存在自体が疑われることになるのである。これは心的性質は因果的効力を持つという直観に著しく反するものである。傾向性の本質主義的理論がこの問題にどのように解決の見通しをあたえるかという点については、次の章で再度述べることにしよう。

五　傾向性の本質主義的理論に向けて

本節では、ブライア説の批判的検討を通してその一部がすでに示されていた傾向性についての私見をまとめなおし、それにいくつかの補強を施したい。まず、明らかになったのは次の三点である。

(1) 傾向性の中には、他の性質によってそれ以上基礎づけられることのない「裸の傾向性」が存在する。

(2) そうした裸の傾向性は、それ自体が因果的基盤としての役割を果たす。

(3) そうした裸の傾向性を含む一部の傾向性は、因果的効力をもつ。

ブライアに代表される標準的見解は、次のような「ヒューム的」直感に大きな影響を受けていると思われる（他に適当な呼び名がないので「ヒューム的」という言葉を用いるが、ヒューム（D. Hume）自身がこのような主張をしたという意味ではない）。

「ヒューム的」世界像：対象のもつ実在的な性質は、それじたいは不活性であって、「力（power）」を内蔵していない。しかし、そうした不活性な性質がどのようにふるまうのかということについては一定の規則性が成立しており、この規則性は認識者から独立に客観的に決まっている。ただし、この規則性は偶然的なものであり、さまざまな可能世界において異なる規則性が成立しているかもしれない。

このような描像のもとでプライアは、脆さや水溶性といった傾向性が、分子構造のような不活性な性質によって実現されると考える。そして、傾向性を実現する不活性な性質のことをカテゴリカルな性質と呼ぶ。したがってプライアにとっては、傾向性は対象のもつ外在的性質であることになる。なぜなら、対象がいかなる傾向性をもつかは、その対象のもつカテゴリカルな性質（これは内在的性質であるとされる）がどのような規則性に従うかに依存し、これはさらに、対象がどのような世界に属しているかに依存するからである。[21]

結局のところプライアの立場は、傾向性を、不活性な性質およびそれが従う規則性（あるいは法則）に還元することに等しい。こうした主張を、傾向性についての「カテゴリカリズム（Categoricalism）」と呼ぼう。これに対して、本稿が推し進めようとする立場は、傾向性が対象の所有する性質として世界の中に存在することを主張するものである。そして、因果的効力を組み込まれた傾向性は、そのふるまいかたについて対象の外部に依存することがない。したがって、

（4）傾向性は、対象のもつ内在的性質である。

誤解のないようにこの点をもう少し正確に述べるなら、傾向性の可能な顕在化のうちどれが生じるかということは外部世界に依存する。しかし、いかなる条件のもとでいかなる顕在化が生じるかということについては外部世界で実際にどのような条件が成立しているのかとは独立に決まっているのである。傾向性の同定においては、いかなる条件のもとでいかなる顕在化が生じるかということが本質的となるのである。こうした傾向性の理論は、「本質主義的理論（Es-

sentialist view)」と呼ぶことができる。[22]

冒頭で述べたように、傾向性は、対象が「条件的に」あるいは「可能的に」もつ性質であるように、一見すると思われる。そして、このことが、傾向性の実在性を疑わせるひとつの要因になっているのかもしれない。たしかに、次のような文で対象に傾向性を付与するとき、傾向性は条件的な性格を帯びているように見える。

「この塩の塊が水溶性をもつのは、もしそれを水に入れるならそれが溶けるとき、そしてそのときに限る」

しかし、この文のなかで傾向性が条件的に表現されていることは、傾向性そのものが条件的であることを意味しない。これは、この文を次のように書き換えることによって明らかになる。

「この塩の塊が水溶性をもつのは、それが、もし水に入れるならそれが溶けるということについて因果的に活動的な性質をもつとき、そしてそのときに限る」

このようにして付与される傾向性は、たとえそれが条件的に表現されていたとしても、対象が現実的に所有する性質なのである。したがって、

(5) 傾向性は、対象が現実的にもっている性質である。

「傾向性的／カテゴリカルな」という区別は、述語に関する言語的な区別であり、それが存在論的な区別にそのまま対応していると考える必要はない。たとえ条件文によって付与された性質であっても、存在論的に言えば、その性質は対象によって現実的に所有される内在的な性質だと考えることができるのである。

最後に、ここで素描した傾向性の本質主義的理論が、心の哲学のひとつの難問に解決の糸口を与えることを、確認しておく。傾向性のカテゴリカリズムにおいては、カテゴリカルな性質によって実現される高階の傾向性が因果的効力を失う、という事態が生じた。これとほぼ並行的な事態が心の哲学において生じる。それは、「心的因果において、心的性質が物理的性質によって排除される」という問題である。心の哲学における標準理論である機能主義によれば、心的

性質は、一階の物理的性質によって多重的に実現される高階の性質とみなされる。ここで「物理的世界が因果的に閉じている」というもっともらしい前提を受け入れるなら、心的因果において因果的効力をもつのは一階の物理的性質に限られ、心的性質は因果的効力をもたないことになるのではないかと考えられる（「因果的排除問題」と言う）。ここでポイントとなるのは、心的性質と物理的性質とが互いに異なる階層に属していることが、心的性質の排除の主因になっているということである。シューメーカー的な存在論をとることによって、心的性質と物理的性質とは同じ階層に属することになり、高階の心的性質が因果的に排除されるという事態を避けることが可能になるのである。[23]

六　おわりに

以上本稿では、一つの角度からプライア説の批判的検討を行い、それを通じて、傾向性の本質主義的理論の素描を試みた。プライア説に代表されるカテゴリカリズムは、「不活性な性質としてのカテゴリカルな性質に、それらのふるまい方としての偶然的法則を付け加えることによって初めて、世界に動的側面が導入される」という世界像を維持しようとする。本稿で擁護してきた立場は、そうした世界像にかえて、「性質には、そのふるまい方が本質的要素として組み込まれている」という世界像を推し進めようとするものである。両者の優劣は、おのおのの立場に基づいて哲学的な諸問題をどれだけ首尾一貫して説明できるか、ということで総合的に判断すべきであろう。本稿の立場がプライア説に対してもつ利点は、（1）傾向性が因果的に無効力になるという帰結を避けることができる点、それから（2）心的性質の因果的排除問題に対して解決の糸口が見込める点であった。もちろん、論じるべきことはまだ数多く残されているが、標準的見解に対する代案としての本質主義的理論の可能性を示唆することができていれば、本稿の目的は達せられたことになるだろう。[24]

参考文献

Armstrong, D. M. (1997), *A World of States of Affairs,* Cambridge University Press.

Heil, J. (2003), *From an Ontological Point of View,* Oxford University Press.

海田大輔（二〇〇六）「因果的排除問題と性質の因果説」『科学哲学科学史研究』第一号、三七―四六。

Kim, J. (1996), *Philosophy of Mind,* Westview Press.

Mackie, J. L. (1977), "Dispositions, Grounds, and Causes", *Synthese* 34, 361-70.

Martin, C. B. (1997), "On the Need for Properties: The Road to Pythagoreanism and Back", *Synthese* 112, 193-231.

Mellor, D. H. (1974), "In Defence of Disposition", *The Philosophical Review* 83, 157-181.

Molnar, G. (2004), *Powers,* Oxford University Press.

Mumford, S. (1998), *Dispositions,* Oxford University Press.

Mumford, S. (2004), *Laws in Nature,* Routledge.

Prior, E., R. Pargetter and F. Jackson (1982), "Three Theses about Dispositions", *American Philosophical Quarterly* 19, 251-7.（邦訳『現代形而上学論文集』柏端達也・青山拓央・谷川卓編訳、勁草書房、二〇〇六年、二二九―二四九）

Prior, E. (1985), *Dispositions,* Aberdeen University Press.

Ryle, G. (1949), *The Concept of Mind,* The University of Chicago Press（邦訳『心の概念』坂本・井上・服部訳、みすず書房、一九八七年）

Shoemaker, S. (1980), "Causality and Properties", in Peter van Inwagen (ed.), *Time and Cause,* D. Reidel, reprinted in Shoemaker (2003).

——— (1998), "Realization and Mental Causation", in C. Ginnett and B. Loewer (eds.), *Physicalism and Its Discontents,* Cambridge U.P., reprinted in Shoemaker (2003).

——— (2003), *Identity, Cause, and Mind,* Oxford University Press.

注

(1) 例えばMumford (2004) がこの立場をとっている。ちなみに、この立場によればすべての性質は傾向性的性質であることになるから、結晶構造のような性質を「非―傾向性的性質」と呼んだのは適切でなかったことになる。

(2) Martin (1997), Heil (2003), Mumford (1998) などがこの立場をとっている。

(3) cf. Prior 1985, p. 29. 因果的基盤についてプライアは、「先行条件といっしょになることによって、顕在化にとって因果的に実効的な十分条件を構成するような性質」という表現を用いることもある。これらの違いは、本稿においては問題にならない。Prior 1985, p. 42あるいはPrior, Pargetter and Jackson 1982, p. 251も参照。

(4) 特にPrior 1985, Ch. 3およびCh. 5を参照。

(5) 特にPrior 1985, Ch. 5およびCh. 7を参照。

(6) cf. Prior 1985, p. 91.

(7) Kim 1996, p. 130. キムはこの主張を「アレクサンダーの格言Alexander's Dictum」と呼ぶ。

(8) Prior 1985, p. 29.

(9) ibid. p. 43.

(10) Ryle 1949, p. 43.（邦訳五〇頁）

(11) cf. Prior 1985, pp. 71-73.

(12) Mumford 1998, Ch. 7がこの方向を追求している。

(13) cf. Shoemaker 1980.

(14) cf. Shoemaker 2003.

(15) Mellor 1974, p. 171. 太字強調は訳者。

(16) Molnar 2004, p. 131.

(17) cf. Prior 1985, p. 73.

(18) 傾向性の有無が問題にされているのは、砂糖とプラスティックコーティングの全体（複合体）であり、コーティングをのぞいた砂糖の部分だけではないのだ、と言われるかもしれない。もしそうであるならば、砂糖＋コーティングの複合体は、たしかに水

溶性をもたないことになる。しかしこのときは、「βをもつこと＝水溶性」という同一性はもはや主張されていない。

(19) cf. Prior 1985, p. 174.

(20) cf. Heil 2003, p. 92.

(21) cf. Prior 1985, Ch. 5. なお、D・M・アームストロングは、規則性は、実在的な法則によって基礎づけられ、説明されると考える。しかし、傾向性は対象のもつ不活性な性質によって実現されると考える点において、ブライア等と同じ陣営（カテゴリカリズム）に属する。

(22) D・H・メラー、シューメーカー、マンフォードといった論者が、傾向性についての本質主義的理論を推し進めている（cf. Mellor 1974, Shoemaker 1980, Mumford 2003）。これらの本質主義者達の立場と、本稿の立場との十全な比較検討は、別の機会に譲らなければならない。

(23) 詳しくは、海田（二〇〇六）を参照されたい。

(24) 草稿に対して有益なコメントを下さった伊藤和行、出口康夫両先生、また京都科学哲学コロキアム（二〇〇六年十一月二六日、例会）において有益なコメントを下さった方々に感謝申し上げます。

（筆者　かいだ・だいすけ　ダーラム大学哲学科博士課程／哲学）

schungsprogramm in den Vordergrund rückt. Eine gegensätzliche Art der Weber-Rezeption stellt Pierre Bourdieus Kultursoziologie dar, die die Vielfältigkeit der "Interessen" und den konflikttheoretischen Ansatz bei Weber betont. Die beiden Arbeiten sind Beispiele der selektiven Rezeption der bestimmten Elemente in der Weberschen bzw. weberianischen Ansätze.

In diesem Überblick stellt sich heraus, dass eine konsequente Rekonstruktion des "Weber-Paradigmas," die gleichzeitig die Komplexität im Weberschen Werk berücksichtigt, ziemlich schwierig ist, so dass eine solche Arbeit mehr oder weniger selektive Rezeption der Weberschen Ansätze nicht vermeiden kann.

Towards an Essentialistic Theory of Dispositions

by

Daisuke KAIDA

Department of Philosophy
University of Durham

Elizabeth Prior advanced a theory of dispositions which is still considered to be an orthodox view. The theory has two central theses: (1) dispositions must have causal bases (Causal Thesis); (2) we cannot make any identification of dispositions and causal bases (Distinctness Thesis). These two theses, in combination, bring about a consequence that dispositions are causally impotent (Impotence Consequence). If we accept a plausible tenet that to be real is to possess causal powers, it follows then that dispositions are not real properties. This should be unpleasant even for Prior, as she explicitly commits herself to disposition realism.

I try to avoid Impotence Consequence by attacking Distinctness Thesis. Prior presented three arguments for Distinctness Thesis. The first argument relies on the empirical plausibility that a disposition could be multiply realized by various causal bases in various objects. The plausibility of this argument, however, draws on ambiguity about ontology of higher order properties. I offer an ontology of properties, which has particularistic characters and allows us to identify dispositions with their causal bases.

Prior's second argument points out that some manifestations of dispositions could be blocked by other properties of the same bearer. This argument, however, overlooks the fact that dispositions need their 'reciprocal partner' dispositions for their manifestations.

The third argument relies both on the Kripkean thesis that dispositional predicates are non-rigid designators and on a logical possibility that one and the same disposition might behave differently in a possible world where different natural laws obtain. While accepting the former (Kripkean thesis), I argue that we are not forced to accept the latter. We can explain the apparent contingency of natural laws by means of objects' contingent *possession* of dispositions.

In section 5, I propose an essentialistic theory of dispositions as an alternative to Prior's. The theory claims that there exist ungrounded (bare) dispositions. According to the theory, the ungrounded dispositions are identical with their causal bases, and are causally potent for that reason. It is also claimed that dispositions are intrinsic and actual properties of their bearers.

Locke on the Resemblance between Ideas and Qualities

by

Seishu NISHIMURA

COE Research Fellow

Kyoto University

In *An Essay concerning Human Understanding*, Locke argues that, in the case of primary qualities such as size, shape or motion, ideas resemble the qualities they represent, while in the case of secondary qualities such as color, taste or sound, ideas are not like the qualities they represent. The puzzle is what exactly Locke means by "resemblance." Lockean ideas are mental entities, whereas qualities are physical properties. Given this metaphysical gap between ideas and qualities, it seems too naive to say that ideas may or may not resemble qualities literally. For this reason, many Locke scholars have interpreted "resemblance" in an anti-naive way. My aim in this paper is twofold: first, to argue that the naive interpretation is indeed the right interpretation of "resemblance"; secondly, to explain how Locke's epistemological method allows him to maintain that ideas may literally resemble qualities.

We can vindicate the naive interpretation by dismissing the two leading anti-naive interpretations: causal interpretation and intentional-object interpretation. The former is an interpretation, which avoids the above metaphysical problem by identifying the resemblance with the sameness of the vocabularies used for denoting ideas and qualities in the causal account of perception, as far as the primary